

---

# 柚色物語

雄花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

柚色物語

### 【Zコード】

N8127D

### 【作者名】

雄花

### 【あらすじ】

ビンボーで女顔な少年・柚木柚はおバカ母のせいで超・お金持ち学校に入学することに!~変人たちに振り回され、柚の学校生活ははちゃめちゃに~じたばたラブコメです!

## 第01話「超・お金持ち高校に入学！？」

僕の名前は、<sup>ユズキコス</sup>柚木柚女顔で、趣味はお花の水遣り。なんとも、女の子っぽい

男子です。世界でいちばん、怖いものはあ！・・・女の子かな？やっぱり。

僕は、幼い頃から女性に囲まれて育つてきた。

父は、母が結婚してまもなく逃走。妹・桜と、姉の梓ねえちゃんにいつも、いじられてきた。

そして、一番の問題は・・・！母ですな。

かあさんの名前は、<sup>ユズキケイ</sup>柚木桂と言ひて、勝手に幸運を呼ぶ招き猫だとか

いつの間にか、100万の借金を背負つてきたとか・・・

その、借金を僕が汗水たらして！（桜と、梓ねえはやらない）頑張つて返済したらあ・・・

そして、また変なもん買つてきてさあ・・・

おかげで、うちまつりつもピンボーカー！

で・・・僕のこれから巻き起こる波乱な人生は、おバカ母のせいだ、

始まるのだ・・・

「 ゆうす君 」

なんですか？ マーク、語尾につけてなんですか？

ただ、つざこだけなんですけど？

そして、また僕に働かせようつてわけなのか？

ていうか、消えてくれないかな？

「 なに・・・？」

ため息交じりで、僕は答えると、逆に母は「 ハハハ 」ながら言った。

「 柚君、来年、高校受験しよう？」

「 ああ、そだね・・・」

「 でね？」

でねでね？と、母は表情を変えずに、僕に近寄る。

は？ 気持ち悪いんですけど？

そんなに、顔近づけないでください。そもそもので。

「柚君は、<sup>オウコク</sup>皇国学院に、通つことになりましたあ―――！」

「はあああああああ―――！」

「あらへどつしたの？！」

「どつしたのじょなこよおーお金はー？そんな、お金あるの？―――！」

「特待生で入れば？学費めんじょだし！」

「マークいらなによー！―――でいうか、無理ですかう！」

「大丈夫 柚君なり、出来るよ！」

「30過ぎのひのこ、女子高校生みたいなノリはやめりあおおお――！――！」

「大丈夫 住むところは、宿直室に泊まつてもらえるよう、いったから！」

「それって、僕が入学するみたいな言い方だなああああ――！」

「大丈夫 絶対、合格するから！」

「消えてくれ。マジで。」

ひゅう――木枯らしの効果音がに合つ表情を僕はしたと思つ。

だって無理だと思つていたから。

このままじゃ、高校もは入れないとつっていたから。

逆に、中学に進入する桜や大学に行く梓ねえを優先すると

三に決めていたから、

半分嬉しひ気持せもあつた

一  
絶対  
受かんないよ！！

蒼い空に、僕は思いっきり叫んだ。

そして・・受験当日。

僕は、わざわざもつたいたいない、電車賃を使い、

わざわざ!! (そこ強調) 新潟から東京に来たんだよ!!?

そこが、落とし穴……

周りは、人でたくさんだつた。皆、お金持ちっぽい人ばつかで

思わず、涎が垂れてしまつた。

まあ、こんなかんだで？一応、試験を受けてみた。

その前に、可愛い女の子に出会った。

人じみの中で、僕は一番に見つけた。

長い、綺麗なピンクの髪を、一つに結んでいて

ぼーと、空を見つめていた。

僕が、ぼーと見ていると、

「なに？じりじり見ないでよ。」

「はあ・・・」

「あ・・・じゃないわよ！私を見たのだから、罰金10万よ！

「無理です！僕には、払えません！」

「冗談にきまつてこないじやない。この・・・女顔！――

この、女顔！――と言つてこなが、僕の精神が腐り落ちた。

ヤク、99パーセントフショウ。

キノウティシピーピー

て！ふざけている場合じゃあ！

「ん・・・試験、お互い、頑張りましょうね。」

僕が、一応言つてみたらその少女は・・・

「女顔に言われる筋合いないわよつーつたら、不合格になつたら？」

「はうひー・・・

これで、僕の精神はズタぼろになつた。

もう、泣きそり・・・

「じゃね。」

そして、辛口少女は、去つていつた。

なに? 僕、なんかした? ?なんか、悪いことやりました? 神様!

それなら、あのおバカ母を滅していくださいよ! -

あれ、あれですか? 僕が間違えて食べてしまつた

スーパーのショートケーキ約、150円の高級ショートケーキですか?

すいませんすいません! あれは、間違えてですね~! -

なにやつてるんだ・・・僕はあ・・・

「試験開始！！」

あれ？ いつの間にか、始まつて！

僕の、前には試験用紙が配られた。

で、書を始めてみると

あれ？簡単じゃね？

あれ？ これ、 分かるのですけど・・・

あれ？ こんなに、簡単なんですか？

ごめんごめん、今頑張る受験生たちよ、すまん。

# 試験しゅーりよー・・・

以外と、簡単だったな。いけるかも？これ。

すごい不安だ。ものすごい。  
く。

さてと、帰るか！

そして・・・結果の紙が届いた。

結果は?

「ううかくう? ? ? そりに、特待生! ? ?

「やったじゃない! 柚君っ!」

最初に喜んでいたのを、僕は後に後悔するのも

— いつも想つていなかつた・・

## 第02話「宿直室での変人第一号」

僕、柚木柚は女顔であり趣味がお花の水遣り女の子が苦手。

昔っから、家族の世話係を担当していたので料理などが得意。

そして、ビンボー少年でありながら・・・

と・く・た・い・せ・い・で、あの超お金持ち学校、皇国学院に入学することになった。

明日から、僕の新生活が始まる前に明日からの僕の寝場所となる宿直室に荷物を置くことになっていた。

ボストンバック(つかいすて)には、洋服と下着と小銭しか持つてきていない。

今頃の学生とかは、最新の携帯電話とか持つておもひがい生憎、僕にそんなものは必要ない！

まあ・・・一度・・・結構ほしいな、と思つたりはするけどや・・・

でもお！けえたい電話なんかなくつたて生きていけるんだよ！ホームレスのおじいさんが叫んでいた！！

叫ぶ必要はないと思うけど・・・

てことで、家からおよそ3時間、僕は今皇国学院の前にいる。

王国学院とは、全国で一番お金持ちが通つていて

その面積は、約30000haヘクタールあるし、しかも超・頭がいい名門校で偏差値は65以上という・・・化け物みたいなところ。

それに、全ての設備において全てがトップクラス！

あのかの有名な、三菱企業の娘さんだつて入つてているといつ事だしあの政治家の風祭大臣の娘さんだつているといつ！

まさに、全てにおいてトップクラスだね！

僕の胸は弾むが、少し残念なところがある。

だつて、梶と梓ねえに悪いじやん？

それに、僕がいなかつたら柚木家おしまいじやん？

あと、明々後日スーパーの特価売りがあるじやん？あ、知らないか・

・

ああっ！なんで明日入学なんだあ―――！楽しめにしていたのにいいいい！！！

「柚木柚君？」

「はへ？」

後ろから、女人の声がした。

僕が振り向くと、20代後半ぐらいの、女性が立っていた。

「い、黒い髪をしていて髪を後ろに束ねていた。

すらりとした体からは、まさに大人の女性というのが見事に感じられた。

いやあ、うちの母とはちがうねえ！

「はい・・・・柚木柚ですけど・・・・

僕がそう言つと、女の人はニコリと微笑んだ。

「始めてまして、アカツキリエ暁理恵と申します。一応、あなたの担任よ。」

「僕の担任の先生ですか～～」

「」

暁先生は、僕の腕を引っ張ると校内に入った。大きい銅像、壁掛け・

・・僕の目には高級なものが入つてくる。ほ、ほし・・

そして、ドアの前で先生は止まる。

そこには、『宿直室』と大きく書いてあった。

そつかあ～～ここが宿直室かあ・・・

ほお～～と僕が見とれいたら先生がドアを開ける。

まさに…まさに…部屋の中は僕が望む家庭環境だった。

テレビは、あんまり大きくななく部屋の中もあんまり大きくななく…

ああ…！僕はこれを望んでいたんだ――――――！

あまりの嬉しさになきそつ…・・・僕…・・・

「柚木君の部屋はこちらね。」

なんと！僕の部屋まであるのか！豪華すぎる…

「普段は、勉強会に来た子達の寝場所なんだけど…・・・柚木君が使つてね。」

「はい！はい！…」

僕は、飛びつくかのよつて、ドアを開けた。

そこは和室で向こう側には窓。

「うう…・・・神様あ・・・ありがとおじぎいまあーす！

僕が荷物を置こうとしたとき。

床ではなく、硬いなにかに当たった。

なんだ？とそれを見てみると…・・・

「わあ！……」

女の子が寝ていた・・

「うわうわー！ああ！……」

もう、驚きのあまりに叫ぶ僕。

その、女の子のまぶたが静かに開き始めた。

「ん・・・・・」

女の子が目を覚ますと、目の前にあつた僕の顔をじーと見つめる。

その目はなんかボーとしていて・・・

髪は、茶髪のショートカット。

3秒ぐらい経つたときかな？女の子が口を開く。

「何で・・・空は青いのだ？」

「は？」

「だから、何で空は青いのだ？」

「ん・・・・地球だからじゃない？」

「そうかあ・・・・地球だからか・・・・」

奇想天外な、女の子の質問に、感づ。

女の子は、はあーとため息をついた。

「名前はなんといつのだ？」

「柚木柚ですけど・・・」

「私は、カガセアオバ加賀瀬青葉といつのだ。宣しくなのだ」

「うん・・・宣しく・・・」

加賀瀬さんの微妙な空氣に乗せられながら、僕は笑顔で加賀瀬さんと握手を交わす。

その時、暁先生が急に部屋に入ってきた。

息は荒く、どうしたのかなーという感じ、どうしたのかなあ・・・

「青葉あーまだかえつていなかつたのー！」

「うん。眠かったのだ。」

ぐぐつと、加賀瀬さんは首を縦に振る。

「もおー今日は、居候さんが来るつて言つたでしょ、イチゴ苺もみまも帰つたわよー！」

「だつてえ・・・なのだ〜〜」

頬を膨らませて、ふてくされる加賀瀬さんをほつといて、暁先生は僕に謝る。

「ごめんね！ ちょっと、昨日勉強会があつて・・・青葉！ もう、帰りなさい！」

「はあい・・・」

加賀瀬さんは、とぼとぼと帰つていった。

何か・・・変な人にはつちやつたなあ・・・

## 第03話「女顔つて好きじゃない」

きつい・・・はつかり言つてきつい・・・

てこいつが、なんでこりんなことやうなきやいけないのかなあ！

『自動電力発電』だなんてつ！

もひ、汗はだらだら。喉渴いた。だが、僕は自転車をじぎ続ける。

「せんせえ・・・なんで、こんなことお・・・」

暁先生は、チューとオレンジジュースを飲みながら答えた。

「あなたをただで泊めるわけには、いかないでしょ？これから、いろいろやつてもらうわ。」

「はあはあ・・・だけでもうがつ」・・・はじま・・・

僕が、死ぬ気の勢いで人差し指で時計を指す。暁先生は、手に持つていたオレンジジュースを握りつぶすと疾風の「」とく

部屋を抜け出した。

せんせえ・・・あなたは、鬼ですか・・・といつか・・・僕・・・動けないのですが・・・

「 もう・・・ダメ・・・

僕の意識は飛んでいった・・・

\*

おかしいなあ・・・先生に預けといたプリントが見つからない・・・  
職員室にもないし・・・

一応、宿直室に来てみたけど・・・ないなあ・・・

うへへん、仕方がない。直接先生に聞いて・・・

『 がたつー.』

向いの部屋から、なんか物音が聞こえたよーじうしたのかなっ！

私が、急いで駆けつけてみると知らない女の子が寝込んでいた。

その横には、テレビで見たことがある『自動電力発電装置』

ああ・・・また暁先生か・・・

もしかして、あれかな？先生が言っていた、居候さん。

へえ・・・男の子って言つてたけど、まるつきり女の子じゃない。

先生のボケも相変わらずよね。

てこうか、なにせりせてるんだ・・・先生は・・・

も、この子すぐだぐだじやない・・・

可哀想に・・・先生つてたまに無茶なことやらせるとかうな・・・

とつあいす、手当でしないと。

私は、女の子の側に近づく。

れいわいとした、袖色の髪。汗が、れいわいと輝いて、綺麗だった。

思わず、じきっとしてしまつ。

つて、私レズじやない！

それに、この子苦しそうだしー。

見惚れている、場合じやないわよー。

ふーと、ため息を漏らしながら女の子の肌に触れようとした。

その時。

女の子が田を覚ました。

「ん・・・誰・・・ですか？」

女の子は、うつすら目を開けて、私に聞いた。

「石ノ巻<sup>イシノマキ</sup>で、いつの。あなたは？」

「う・・・自分は、柚木柚です。」

はあはあと、息を荒くしながら、柚ちゃんは自己紹介をする。

こんなになるまで、なにやつたんだ・・・先生・・・

改めて、暁先生の無茶振りの怖さを知った。

「柚ちゃん。私が看病するから、じつとしててね？」

私は、柚ちゃんを膝の上に乗せた。

じくじくと、柚ちゃんはうなずいた。

まず、全身の汗を拭いつ。タオルで、顔の汗を拭き

首、腕、足 よし、次は胸

胸を拭いつとした時。彼女の胸がないと言いつて、殴づく。

もしかして・・・男つ！？

えええ―――。こんな綺麗な顔してゐるのに、

てこうか、私・・・ひ、膝枕つ・・・

私の顔は真っ赤かになる。

ああ・・・もう柚君より汗が出てきそ・・・

「大丈夫ですか・・・？顔、真っ赤かですよ？」

柚君が、私の顔に手を近づけてくる。

柚君が男と知り、私の体温は急上昇中なのに・・・

そんなことされたら・・・私・・・！

「つ」

田をぎゅっとつぶり、なるべく柚君の顔を見ないようになります。

だって、柚君がとっても綺麗だったから。

「すいません」

「へ？なんで、誤るの？」

「だつて」

「黎一もつ時間だよ――――！」

その時、私の親友が入ってきた。

## 第04話「幼馴染」

私の、一番の親友は幼稚園からの幼馴染でもあり、世界で一番可愛く、かつこよかつたりもする。

そして・・・一番の憧れ。

私が一生成れない、鏡の中の人物。

その人の名前は、石ノ巻黎。彼女とは、幼稚園のときに出会った。

いつも、遠くから彼女を見ていて、その時から彼女のことを『憧れの人』として見ていた。

ある時からだつた。彼女が憧れの人+親友になつたのは。

私は、金持ちのせいか、幼いころからほとんど家の中にいて外の世界などあまり見たことはなかつた。

ある、好奇心で私は外の世界に行つた。

今まで見たことのない場所。そして、大勢の人。

それがあまりにも怖くなつてきた。

道の端つこのほうに泣きじやくりながら誰かに助けを求めていた。

だれか・・・助けて・・・

が・・・周りの大人们は私を見て通り過ぎていくばかり。

あらまあかわいそうね・・・迷子かしら?と言しながら通り過ぎていく人もいて。

なら、助けてよおーと、幼い私は心の中で叫ぶだけだった。

そんな中、ただただ、泣き続ける私に手を差し伸べてくれたのは、彼女だった。

「どうしたの?」

涙が止まる。最初は、驚いていただけだった。

「迷子?」

泣きすぎたのか言葉が出ない。

「君、同じ幼稚園の三菱遙花ちゃんだよね?分かるかな?石ノ巻黎  
だよ。」

「うん・・・」

「あはー!泣いてないで、一緒に探検しよー!」

「うん・・・」

最初は、戸惑う私だがだんだんと彼女の優しさに心が溶け始める。

安心感と、嬉しい気持ちが湧いてきた。

その後も黎と私は仲良くなり、小学校や中学は違うのにたびたびあつたりし・・

やつと、高校で同じ学校になつた。

私は、その人の事が大好きだ。いやいや・・恋愛ではなくて・・・友達として。一番の・・・親友だから。

で、そんな親友が生徒会長に選ばれて今日なんか挨拶やらやるのどこにも見当たらない。

それに先生によれば、特待生君も来ていらないらしいし。

しょうがないから私が探してやるかあと、宿直室を見に行つたら・・

うわーお。新ネタはつけーん！な、なんと、彼女が男子を膝枕しているではありませんか！

こりゃあ、今田に日記に書かなければ損だな。

私が口をゆがめたのか、彼女は真っ赤になつて必死で抵抗し始める。

「ち、ちがうのー今、遥花が考えていることは誤解なのー！」

今、私が黎に彼氏はつーけーん！宿直室で（ペー）中だーと思つたのか。

はつはつは・・・全くちがうねー

黎は顔真っ赤になつて。可愛いね～

「ふ～ん・・・黎の新しい彼氏があ～～、ビ～～までこつたの？」

私が少し、からかうともつと赤くして

「ふえ、だからあ～彼氏とかじやなくでえ～！」

黎は、『彼氏』や『キス』とか恋愛に関するワードを聞くと、いつも顔を真っ赤にする。

う～～ん、純情。  
ピュア

「わうつ～～柚君も早くつ～～

「へ？」

柚君といわれた男子は床にじ～んと頭をぶつけた。

私は、柚君に近づき、あることを聞く。

「どうだつた？黎の膝枕は？」

「はえ？」

柚君はとボケてこるけど、黎の顔はヒートアップ

「遙――――――――――」

「「」めん、「」めん」

「 今日と明日はあ...」

黎の周りには、ダークオーラが。

まずいな。

「 ていうかー始業式始まるわよー」

私の言葉で、黎は戻る。

「 もやつーもう、始まるじゃないー」

黎は、時計を見てあわて始める。

「 セリ セリ行くよー柚君もー」

「あ、はあ」

「 はあじゃないー」

柚君と黎は先に行つてしまつた。

急がないと。

これからも、見守つているよ、黎。

私も、一人のあとを追つた。

## 第04話「幼馴染」（後書き）

本物の「菱也」ではありません。

## 第05話「クラスメート」

「 以上、始業式を終わりにします。」

石ノ巻さんの、挨拶で体育館に拍手が巻き起る。

僕の周りはざわざわとゆれ始めた。

「 やつぱ、生徒会長つてかわいいよなあ～～

「 だよなつ、絶対彼女にしてー」

そんな話が聞きたくもないのに耳に入つてくる。

確かに、石ノ巻さんは美人だ。

少し、茶色がかかつている黒色の髪はさらさらとして、

髪の右側をヘアピンで止めている。

僕でも分かるべっぴんさんだ。これは小説だから、皆に見せられな  
い事が悲しい。

うん、ホンと。本当だつてば！だから、石ノ巻さんはモテル。

僕の隣には、三菱さんがない。僕がちりつとみると、視線をそらす。  
嫌われてるのかなあ・・・

きつぎり、僕たちは始業式には間に合つた。もう、始めますよーと

言つといひで。

僕も一応、特待生だから新入生代表の言葉とこいつのをやつ・・・  
はあ・・正直疲れましたよ・・同長。とくたいせーて学費免除だけ  
ど、大変なんスね。

\*

僕のクラスは、1・Bだ。教室に入ると、名前の順になつている、  
席に座つていぐ。

ちょうど、全員が自分の席に座つた時、僕らの担任、暁先生が入つ  
てきた。

「このクラスを担当する、暁理恵です。宜しくお願ひします。」

暁先生が皆に自己紹介をする。暁先生は、机に手を置くと

笑顔で言つた。

「よじつーじやあ、とりあいす自己紹介だつー」

なぜか、ノリノリな先生だが、周りはマイナスオーラが漂う。

僕は、別にいいんだけど・・・あれかな?言つのが嫌なのかな?

「では、綾鷹君からビギー。」  
アヤタカ

「エイと、いわんばかりの笑みをしながら綾鷹君と言われた男の子を指す。

男の子は、無口で立ち上がると口を開いた。

「あやたかゆうじちやうつ綾鷹祐一郎だ。宜しく」

女子からだらうか、黄色い声が起きた。

綾鷹君って、もてるのだらうか？「へ、まあ・・・かつ」いいもんね。

・

「はいっ！次いー！」

先生は、もつ、ノリノリで順番に指していく。

生徒たちは、立ち上がり自己紹介をしていく。

5番田ぐらにかな？金髪の髪をした女の子が立ち上がる。

「・・・・・」

女の子は無口でその場に立っていた。

田口紹介もしないから、どうしたのかなーと周りはその女の顔を覗き込む。

すると、女の子はどこからかホワイトボードを取りだし、マジック

ペンでキュッキュッと書いていった。

え？え？僕も周りの人も意味が分からない。

そして、女の子はホワイトボードを持ち上げた。

『置網みま』  
おきあみ

窓が開いていないのに、教室には冷たい風が吹いた。

変人だ！たぶん、僕とクラスメートはシンクロしたと思つ。

「え、えと次！」

空気を換えようと、先生が次の人に指す。

「加賀瀬青葉つていうのだ。」

加賀瀬さんも同じクラスだったのかあ～。

次のは、先生が指名していないのに立ち上がつた。

「風祭苺！よろしく～～」  
カザマツリイチゴ

笑顔で風祭さんは自己紹介をした。こいつこいつて癒されるよね～～

で、どんどん自己紹介は終わり・・・僕の自己紹介が終わつたところで、

チャイムが鳴つた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8127d/>

---

柚色物語

2010年10月21日11時16分発行